

国
語

問
題
冊
子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

- 1 この冊子の本文は10ページまでである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあった場合は申し出ること。
- 2 解答は、問題ごとに、答案用紙(別紙)の所定の欄に記入すること。
- 3 答案用紙は、その一、その二、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験 番号	氏名
1	大塚 茶織
2	
3	
4	
5	

- 4 答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。
- 5 この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

デカルトは、確かなものを見出だすためにすべてを疑うということをみずからに^(a)かし、その結論として、「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」と述べている。思考するかぎりにおいて、「わたしの存在」は、原理的に疑い得ないものである(『方法序説』第四部)。

デカルトがすべてを疑ったとき、自分の身体の存在をも疑ったのであるから、かれはただ自分の思考のみから「わたしの存在」が確かであると結論したわけである。はたしてそのようなことが可能なか。というのも、まっさきに気になるのは「わたし」という語が指しているものは何であるかということである。デカルトはそれをどのようにして知ったのか。

「わたし」という語は、奇妙な語である。たとえば「樹木」であれば、多くのひとが樹木というおなじ対象をその語によって指差すことができる。他方、「佐藤さん」のような固有名であれば、たとえ同姓のひとがいても、ひとは知人のそのひとだけを指差すだろう。

ところが「わたし」については、自分自身を指すつもりで語っているのだが、他人が「わたし」という語を使ったからといって、自分自身が呼ばれたとは思わない。逆に「わたしはジンスカンです」などと述べたなら、——歴史上そう述べることのできるひとが一人いたのは確かだが——、わたしは精神科を受診するように勧められることだろう。

「わたし」という語は、実は、言葉の表現の外にあって、それを語っているひとを指し示す語なのである。それぞれのひとに「わたし」があり、その意味は、言葉で述べられていることが、述べている当の人物にあてはまるといふことである。

「ひとは仕事をもっている」と述べるとき、必ずしも「わたしは仕事をもっている」という意味ではないが、「わたしは仕事をもっていない」ということを含んでいるわけではない。逆に、「わたしは仕事をもっている」と述べれば、「仕事をもっていない」ともいえるが、わたしはそうではない」ということを意味している。他方で、そのおなじ表現で、「あなたは仕事をもっているか?」ということや、「わたしは以前は仕事をもっていなかった」ということや、「忙しくてあなたの希望には添えない」という

ことをも含意させることができるであろう。

何をいいたいかというと、「わたし」は、「わたし」単独では何も指し示してはいないということである。それは、語るべきことがあって、それが語られている相手や状況において、その言葉の言外の意味を示すものとしてしか使用されていないということである。デカルトのように懷疑を尽くしていく場合には、当然ながら消え去ってしまうはずの曖昧な語なのである。

幼児が、しばしば自分のことを「わたし」とはいわず、自分の固有名で述べることはよく知られている。言葉の通例の用法によって、呼ばれる固有名が自分であるとするのは間違いいではないのだが、幼児はやがて、それを「わたし」というような語でいい替えるようになる。

それ以前、「わたし」の指す（わたし）がどうでもいいようなとき、そこでは何が起こっていたのだろうか。そこには、世界に事物や生物たちしか存在しなくて、自分もまたそのひとつでしかないという、幼児には、おとぎ話のようなファンタジー（空想ないし幻想上の出来事）が生きられていたに違いない。

言葉でもって完結した世界が物語られるとき、幼児は、事物や生物たちもおしゃべりする、⁽²⁾ただひとつの世界のなかで生きることができる。そのなかに固有名の自分がいて、生きてそれを聞いている自分と同一かどうかを気にしないでいられるからであり、だれが語っているかを意識しないでいられるからである。

しかし、そこに、だれか他人が登場してきて、そのファンタジーが否定されるという事件がいつか起こる。幼児は、そのことを通じて、自分には経験されていない世界が、それを語る人物の背後に控えていることに気づかされる。（わたし）とは、自分とは異なつて語る何ものかのことである。ファンタジーのなかの魔術師ではなく、ファンタジーそのものを破壊したり、与えてくれる何ものかである。

幼児は「物語をして」といっておとなにせがむのだが、それはおとなが新たなファンタジーの扉を開いてくれるからである。だが、おとなは突然、「もう寝なさい」といいはじめる。ファンタジーは、幼児に物語という世界経験の土台を与えながら、その破壊を通じて、幼児を現実の世界へと連れ出すのだ。

世界とは、現実とファンタジーの交錯である。おとなになってもファンタジーの世界に潜り込んでしまうひともいれば、恋人との二人だけのファンタジーにヒタつているひともいる。家族の団欒だんらんも、親子の愛についてのファンタジーとして語られる。父も母も、それぞれただの人間であると知るとは、子どもにとっての、ひとつの重大な課題である。父も母も、バンノウに幼児を支え、助けることができるわけではないのだ。

サルトルに、「他人はジゴクだ」という有名な一句がある(『出口なし』)。その意味では、他人とは暴力なのである。ファンタジーの、荒ぶる強面の破壊者である。否、もつとずる賢くて、ファンタジーのなかに入り込んでかわいい動物を演じたりしながら、最後には冷酷な現実へとひとを突き落とす。とりわけ他人を利用しようとするひとにとっては、それはありふれた手段である。

③ だが、じかに現われる他人、ファンタジーの破壊者の暴力は、それとは質が異なっている。それは、ある意味では、ただ、現実をと、生きよと呼びかける親ないし他人のだが、幼児にとっては、その他人こそ恐怖である。

「わたしは……」とそのひとが口に出した瞬間に、それはファンタジーを破壊するだけではなく、現実の世界には「砕けた鏡」(クザーヌス)のように数多くの「わたし」がいて、決して世界がひとつのファンタジーに完結したりはしないのだということをお教えしようとしているのだからである。

世界にはたくさん「わたし」がいて、わたしもその一人なのだということを幼児は知る。他人が自分のファンタジーを破壊するとともに、自分も他人のファンタジーを破壊することができる。とはいえ、それを実行して、もし他人がそれを拒絶したときには、「わたし」のファンタジーの世界は自己崩壊して砕け散り、「わたし」は残ったファンタジーのかけらを急いで掻き集めるしかないであろう。しかし、それはどのようにしてか。

ヒュームが述べているように、ひとは「自我」そのものを経験することはない(『人間本性論』第一篇付論)。「自我とは知覚の束にすぎない」(第一篇第四部第六節)のだからである。この一句は、哲学史上の最も有名なスキャンダルのひとつとなったが、自我が存在しないということは、おそらくは、つぎのようなことである。

ひとは自我の本質として、意志をもつということ⁽⁴⁾を挙げるかもしれない。しかし、意志は、自分自身にとつては、自分からすることを宣言する言葉と、その言葉をしばしば思い出すという程度のことではない。思い出すかどうかは意志によつてできることではないのだから、行動をコントロールするものとしての意志が存在するわけではない。

他方、意志は、他人の言動の目的合理性や一貫性や整合性を読み取られる場合に存在すると想定されるものであるが、その言動のさなか、心中に、それらを意識した言語表現があつたかどうかはどうでもいいことである。ウソをついているかどうかは、それとは別の、誠実さについての判断である。意志は、行動を知つて行つたか^{おこな}そうでないかを区別するための帰責論的、法的な概念なのであり、日常生活に、その法的思考を適用したものにすぎない。意志は、法が成立したあとに生まれた概念であり、人間の本性にあるようなものではない。

むしろ、自我という意味での「わたし」とは、経験のなかに見出される何ものかではなく、世界と自分の未分化を破壊する「他なるもの」の暴力の^(e)ゲンセンとして、他人の身体に原因として仮想された人格的同一性(パーソナル・アイデンティティ)のことなのである。それを「自我」と呼ぶのであり、他人が自分の言動にどう反応しているかを推察することで、それが自分にもあると仮想するのである。

つまり、こういうことだ。風景のなかに他人の身体があつて、独特の動作をするばかりでなく、自分の方に向かつて働きかけてくる。自分の背後にだれもいないとすれば、それは自分に向かつてそうしているのであり、その自分が含まれている風景を想像するならば、他人に働きかけ得る自分の身体がそこに含まれているに違いない。つまり、「語りかけられている」ということが分かつた瞬間に、語る「わたし」がいるという、そのことがはつきりと理解されることになるであろう。

他人の身体に見出だされたその自我は、いま他人の言動を捉えようとしているこの自分の経験に基づいて捉えられた他人のことである。他人の自我は、推測であるばかりでなく、言葉を語り、他人を主題にする際の前提であり、一切の人間関係と政治的問題がはじまる情動の始原である。

「わたし」という語で、人間はみな対等に行動の原因となるばかりか、その振舞のそれぞれを、「運動」ではなく、「行動」とし

て捉えられるようになる。そこから始めて、社会のなかで生きている（わたし）が、それであるだけではなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようにするのである。

ひとはやがて、自分の自我について問われ、ただちに経験のなかに入りありと自分を見出だすことができるようになるのだが、それはすでに言葉をしゃべり、思考することができるようになっているからである。

したがって、デカルトの、「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」というときの「わたし」は、すでに社会に生まれてきていて、言葉を介して他者と出会っている（わたし）のことでなければならぬ⁽⁵⁾。おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した「自我」なるものは存在しない。もし自我を事物のように捉え、その性質を論じるなら、「わたしとは何か」を見失ってしまうことになるだろう。

（船木亨『現代思想講義——人間の終焉と近未来社会のゆくえ』による）

注 ○デカルト——ルネ・デカルト René Descartes（一五九六—一六五〇）。フランスの哲学者。

○サルトル——ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre（一九〇五—一九八〇）。フランスの哲学者。

○クザヌス——ニコラウス・クザヌス Nicolaus Cusanus（一四〇一—一四六四）。ドイツの哲学者。

○ヒューム——デイビッド・ヒューム David Hume（一七一—一七七六）。イギリスの哲学者。

問(一) 傍線(1)について、「わたし」という語が指しているものは何であるか」という問いに対する最も適切な答えとなる本文中の部分⁽¹⁾を五〇字(句読点を含む)以内で抜き出せ。

問(二) 傍線(2)について、「ただひとつの世界のなかで生きることができるとはどのような世界だと筆者は述べているのか説明せよ。

問(三) 傍線(3)「現実をと、⁽²⁾に生きようと呼びかける親ないし他人」が幼児にとって「恐怖」となるのはなぜか、「ともに」に傍点がついていることを踏まえて説明せよ。

問(四) 傍線(4)の「自我の本質として、意志をもつ」という考え方に対して、筆者はどう反論しているのか答えよ。

問(五) 傍線(5)の「おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した」自我なるもの」に対して、筆者の考える「自我」とはどういうものなのか、整理してまとめよ。

問(六) 傍線「社会のなかで生きている(わたし)」が、それであるだけではなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようにするのである」とあるが、これに関するあなた自身の経験について、三〇〇字程度で述べよ。

問(七) 傍線(a)～(e)の片仮名を漢字に直せ。

次の文章を読んで、問(一)～(四)に答えよ。

昔の隱者を思ふに、徳ある人の世にしたふをむつかしがり、⁽¹⁾仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をも変へ、かたちをも忍びけめ。徳もなく仇もなき人の、たとへ四條五条に金の看板を出したりとも、訪ふべきよしの人こそ訪はめ、さもなき人は見向きもせざらむ。^(a)幼な遊びのかくれんぼも、尋ぬる鬼のあればこそあれ、さるを浮世に隠れ顔なるぞ、なかなかはづかしき心地ぞする。

そもや我が身の上を言はば、かしこき陰を頼み奉り、官路に立ちしも久しけれど、⁽²⁾もとより毒にも薬にもならねば、人にあかれし身とも覚えぬ。雨露の恵み深くして、すなほなる国に鬼もなければ、世に人に我もあかず。ただ病に悩まされ、今は弓も引きがたく、馬にも乗りがたく、さても武士の名に数まへられんは、南郭が竿を吹きけんこの身の上のはづかしければ、^(b)老と病を一荷にして、浮世の関は逃れ出でたるなり。しかれば誰をおそれ何を恥ぢて、さのみは逃げも隠れもすべき。さりとてまた貴顕の門松をくぐり、桃に菖蒲に袖振りはへて、ここの嫁入り、かしこの法事にも連ならんは、いと見苦しう、⁽³⁾官事をさへ辞したればいかでかは。

すぎし比、^(c)いづくの程にか、市中の門柱に「隱居 某」と書ける家札を見て、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、「隱居したる慶び」とて、親しき限りは言ふに及ばず、疎き人々にまで訪はれて、門前しばらく市めけば、昨日の浮世よりやかましく、それまた謝せずばあるべからずとて、家を尋ね門叩かせて、「物申」に人を驚かし、⁽⁴⁾隱居の礼にいそがしきは、をかしかりける世のさまかな。

(横井也有『鶉衣』「隱居弁」による)

注 ○四条五条——京都の繁華街。 ○かしこき陰を頼み奉り——やんごとない主君の恩顧を受けて。

○南郭が竿を吹きけんこの身の上——吹けもしない楽器を吹けるように装って音楽家の中に混じり込んでいた斉の国の南郭のように、技芸もないのに人の中に立ち交じっていた私。

○貴顕の門松をくぐり——権力ある人の邸宅に年始の挨拶に訪問し。

○桃に菖蒲に——「桃」は三月三日の節句、「菖蒲」は五月五日の節句。 ○慶び——お祝い。

○物申——「物申す」の略。訪問を知らせるため、外から家の中の人に呼び掛ける声。

問(一) 傍線(1)(2)を現代語訳せよ。

問(二) 傍線(3)を、必要な語句を補いながらわかりやすく現代語訳せよ。

問(三) 傍線(4)は、どういうことを「をかし」と言っているのか、説明せよ。

問(四) 二重傍線(a)～(c)について、文法的説明として適切なものを次のうちからそれぞれ選び、その記号を解答欄に記せ。
同じものが複数回該当することもあり得る。

(ア) 助動詞 (イ) 形容詞の一部 (ウ) 助動詞の一部 (エ) 複数の単語(または単語の一部)の連続

次の文章を読んで、問(一)～(五)に答えよ。設問の都合により返り点・送り仮名を省いた箇所がある。

子列子窮、容貌有飢色⁽¹⁾。客有言之於鄭子陽者。曰、「列禦寇蓋^(a)有道之士也。居君之國而窮。君無⁽²⁾乃為不好士乎。」鄭子陽即

⁽³⁾令官遺之粟。子列子見使者、再拜而辭。使者去、子列子入。其妻

望^(b)之而拊心、曰、「妾聞、為有道者之妻子、皆得佚樂。今有飢色。

君過^(b)而遺先生食、先生不受。豈不命邪。」子列子笑謂之曰、

「君非自知我也。以人之言而遺我粟。至其罪我也、又且以人

之言。此吾所以不受也。」

(『莊子』による)

注

- 子列子——列子、すなわち列禦寇のこと。「子」を冠して尊称した。○客——子陽に仕えていた他国の出身者。
○子陽——人名、鄭の宰相。○有道之士——すぐれた士。○遣——贈ること。○粟——あわ、穀物の類。
○望——ここでは怨むこと。○拊心——胸をたたく。○妾——女性が自分を謙遜するという言葉。

問(一) 傍線(a)「蓋」、(b)「過」の読みを書け。

問(二) 傍線(1)は「客に之を鄭の子陽に言ふ者有り」と読む。返り点をつけよ。

問(三) 傍線(2)「君無乃為不好士乎」を訳せ。

問(四) 傍線(3)「令官遺之粟」をすべて平仮名で書き下せ。

問(五) 傍線(4)「先生不受」とあるが、その理由を説明せよ。